

一言

大原健士郎『生と死の心模様』に基づく

大島 行雲

『貴方が口を開いて話す時、その言葉は、沈黙よりも価値あるものでなければいけない』

アラビアの格言より

春は嫌いだ。

仄かに鼻腔を擽る沈丁花や梅、そして桜の甘い薫りも。とても柔らかく暖かく、全身の筋肉から精神まで弛緩させる微風も。何より誰もが幸せそうな顔をして上を向いて歩き始める事が。

春が来ても、何一つ幸せになんかならない。誰かが歌ってたみたいに、もしかしたら幸せそうな恋人達も本当は何かを抱えているのかもしれない。でも、私には分からない。分かりようもない。

とても厭な気分。肌を突き刺す冬の冷たい空気の中でなら、この堪らない世の中でも生きていく勇氣が湧くのに。私と季節には温度を一定に保とうとする法則があるのかもしれない。季節が冬になって寒くなると、私の内側は均衡を保とうとして熱い闘争心を燃え上がらせ、春になって暖かくなると、逆に私の内側はじわ

じわと冷たく沈んでいく。周りが楽しそうにしているのに、自分だけが苦しんでる気がするから。

でも、こんな事、誰にも喋れない。部屋に鍵をかけて、電気を消して、四角い窓に切り取られた住宅街の仄明るい夜空を眺めながら、キュアアの物悲しい曲を聞いて、ベッドの上で小声で呟くくらい。お父さんは家にいれば下品な躰をかいて寝てるかテレビに噛りついて愚痴を零してるかで、こんな話したら、「お前は甘い」って聞き飽きた説教を繰り返すだけに決まってる。何でも話しかけるたびに説教めいた偉そうな事ばかり言うのに、娘とは親しく話したいなんて矛盾してるよ。お母さんはお父さんよりはずつといい人だけど、いい人すぎて、私の暗い気持ちなんて理解できそうにない。子供の絵本みたいな人だから。学校の友達は説教もしないし、お人好しでもない。でも、やっぱり思い悩んじゃったりってタイプじゃない。悩み事を相談し合ったりとかしてるけど、本当のところ、一番悩んでる事は口に出さない。毎日毎晩、当たり障りのない馬鹿な話して、ジャンク・フード食べて、何となく楽しそうに過ごしてる。本当に楽しいかもしれないけど、でも、それだけ。違う。何か違う。どこか欠けてる気がする。

ほんの少し咲き始めた桜の花を見上げて、「こんにちは」って挨拶してみる。でも、答えはない。ある訳ない。人間と同じ。後輩に貸したお金も本もCDも返ってこない。物がどうのじゃなくて気持ちの事。友達が多いって良く言われる。でも、数じゃない。

何人いても気持ちには満たされない。ただ、沢山いるってだけ。時には寧ろ私を最低に不愉快な気分させる友達もいる。それは、つまり多分、私も誰かを不愉快にしてるんだろうけど、それでも「友情」は続いていく。みんな、それでも平気なの？ 何か違う。

好きだった奴は、この前、私の知らない女の子と仲良さそうに腕を組んで歩いてた。まるで私とは違う雰囲気の優しげな女の子の最高に可愛い笑顔が、私には最低って感じだった。丁度、一年前の今頃、奴と初めてのデートをしたのを思い出す。私が行きたかって言った水族館、二人で並んで座って食べた焼き鳥、何もかもが辛い思い出になるうとして、自分が惨めでならなかった。もう愛される価値もない人間なんだって。

前から目をつけてたビルの前に着いた。決心して家を出てきたつもりでも、やっぱり躊躇して足が止まる。ゆっくり見上げると、ランドマークタワーなんかには比べれば全然低いけど、でも、上から落ちたら間違いなく死ぬ。

どんな気分なんだろう。落ちていく時の気分は、落ちていく、落ちていくのが分かるのかな。ずっと分かるのかな。このくらいの高さじゃ気絶しないのかな。馬鹿みたい。してもしなくても、問題は落下じゃなくて着地なんだから。多分、ぐちゃぐちゃになつて、スプラッターなんだろうな。いい気はしない。って言うか、やだ。ローラ・パーマーみたいな綺麗な死体になれるなんて思うほど、私は自惚れてないけど、屠殺の跡みたいになるのは、他の

方法にしようかって思う。これまで色々、考えた。首吊りは実際に試してみた。凄く死にたくて、今すぐに死にたかった時、部屋でセーラー服のスカートで試しに首を絞めてみた。ちよつと引つ張っただけで喉に食い込んで苦しくて、結局、止めた。あの時は、それほど死にたくなかったのかも。それに、ドラマみたいに綺麗に死ねないのを本で読んだのもある。絞首刑の後の様子を書いた死刑執行人の文章を読んだ時は、本当に気持ち悪かった。綺麗に死ねそうなのは薬だけど、それは簡単には手に入らない。首首を切るのは、どうしても刃物を首に深く刺すだけの勇気が持てそうにない。そんな勇気があれば死んだりしない。入水とか焼身とかも、ちよつと勘弁。泳ぎが得意な私じゃ自然に浮いちゃって沈まないかもしれないし、焼身なんて法輪功じゃないんだから、そんなの狂信的な変人でもない限りできない方法だよ。結局、飛び降りるのが一番だって思った。綺麗には死ねないけど、どの道、死んじやえは同じだ。それより、決めて目の前に倒れれば、それで終わり。途中で気が変わっても空は飛べないのがいい。死ぬしかない。それがいい。

心を決めてビルに入つて、エレベーターのボタンを押した。他には誰もいない。いない方がいい。誰にも会いたくない。もう、誰にも会いたくない。人間なんて最低、人間関係なんて最低だ。信頼とか友情だとか、永遠の愛だとか、みんな言葉だけの嘘。誰も実践なんてしてない。私が死んだって、どうって事ない。

街の雑踏も鳥の鳴き声も聞こえない。静かな建物の中で、エレベーターの扉が開く無愛想な機械音だけが耳に入り込む。死刑台のエレベーターって奴？ 一瞬、足が前に出ない。でも、すぐに踏み出して乗り込んだ。心臓がドキドキしてる。こんな気持ちは高校受験以来かもしれない。

本当に死ぬ？ それとも、もう少し生きてみる？

ハムレットみたい。トウビー・オア・ナット・トウビー、だっただけ。ま、英語なんて、どうでもいい。

こんな風に生きてる自分は誰かを幸せにしてるのかな？ 誰かを幸せにできるのかな？ たくさんの命を食べて、二酸化炭素を吐き出して、私は十何年、何をしてるの？ これからの、もっと長いはずの人生を、私は何をしてくの？ 何ができるの？

運命なんて信じてないけど、何か決まっちゃってる気がする。目の前に大きな道が広がってる様に見えて、その先に乗り越えられない壁が立ちはだかつてる。橋のない深い溝がある。

多分、人は人を理解なんてできない。赤の他人はもちろん、仲のいい友達でも家族でも。黙ってれば分からないけど、言葉にしても気持ちの一割も表現できない。そういうのって寂し過ぎるし哀しすぎるけど、でも、そう。みんな、独りで、それでも生きてて。

階数を示す頭上の数字が増える度、心臓の鼓動も高まっていくのを感じる。今なら引き返せる。自分は何をしてるんだろう？ 死

のうとしてる。これは命のカウントダウンだ。途中で降りようかという思いが過ぎった瞬間、場違いに軽いチンという音と共にエレベーターは最上階に着いた。扉が開く。誰もいない。激しくなる鼓動を抱えたまま、夢遊病者の様にゆらりとエレベーターから出て、屋上への階段へと足を踏み出す。蛍光灯が弱々しく光っている。悩む間もなく青いペンキが塗られた鉄扉の前に着いた。

思わず唾を呑み込む。苦しみに耐え続けた無表情のままだが、内心は酷く乱れているのが自分でも分かる。本当に死んじゃっていい？ 後悔しない？ 生きてたら後悔できるし、また死ぬ事もできるけど、死んじゃったら後悔なんかできないし、もう生き返る事はできない。力なく、しかし緊張しきった右手で銀色のドアノブを握る。これが開かなかつたら諦めよう。自殺防止だが防犯だかの理由で鍵がかけていたら仕方ない。家に帰って、これからどうするべきかをもう一度考えてみよう。

ドアノブが回った。扉は開いた。

春の夕方、誰もいない屋上。人間味の欠片もないセメントの床を歩いて、ビルの端へと向かう。何も誰も遮るものはない。生きる事を遮るものは世の中に無数にあるのに、死ぬ事を遮るものは拍子抜けするくらいにない。小学生でも乗り越えられる鉄柵だけ。両手で鉄柵を掴んで攀じ登ろうとして、そのまま動きを止める。

最終関門の一步前だ。ここを越えれば、後は飛び降りるかどうかの決断しかない。乗り越えてから考えよう。取り敢えず乗り越え

よう。ここまで来たんだ。ここまで来たのは冗談なんかじゃない。

攀じ登る時、落っこちない様に力強く鉄柵を握る自分に気付いて、馬鹿馬鹿しさに内心笑いを漏らす。どうせ落っこちるつもりなのに、今更、何を気にしてるのか。

鉄柵から下りて、到頭、ビルの端に、ゴールだかスタートだか分からない場所に立つ。急に視界が開けて見える。薄い水色を混ぜた様な白い空は心なし暗くなり始め、街には無造作にビルや民家が乱立している。緑は探さなければ見つからないくらい少ない。

足下へと目を移す。白いスニーカーの爪先から十センチ向こうには何も無い。奈落だ。暗闇じゃない。ただの透明な空気だ。その透明な空気が、圧倒的存在感で横たわっている。一步を踏み出せば、あつと言つ間にすり抜けていくのに、何故かそれが大きな塊に見えた。

ここで一步、ここで踏み出せば。それで、終わり。

その一步が、それが踏み出せない。死にたくないわけじゃない。生きたいわけじゃない。でも、踏み出せない。初めて舞台に出る時の様に足が竦んで動かない。

遙か下にはアスファルト舗装された道路と寂しい街路樹が見える。ここで踏み出した途端、自分の体は、あそこどこかに叩きつけられる。テレビのサスペンス・ドラマで見た死体の場所を示すチヨークの人型をそこに重ねて想像する。アスファルトは血で赤黒く濡れているだろう。そして、そこで自分の苦悩は命と共に

消えるだろう。

それでいいの？ 消えて本当にいいの？

中々、決心がつかない。まるで赤子の様に、たった一步を踏み出す事さえできずにぐずぐずしている。でも、背中の鉄柵を越えて戻る事もできない。死ぬ事も生きる事もできない。

何ら決定的動作に移れぬまま、屋上で時間は過ぎていく。春の夕方、視界の正面に広がる団地のビルの谷間に橙色の大きな西日が沈み行こうとしていた。白い壁が妙に赤く照らされているのを、心ここにあらずの状態で見るともなく眺めていた時、足下に気配を感じた。自分の存在に気付いた通行人が口を開け、こちらを見上げている。

気づかれた。早くしなきゃ。そう思っても、そう思ってる筈なのに、相変わらず足は動かない。飛び降りる事も引き返す事もできない。頭の中は障害を起こしたコンピューターみたいに真っ白で、ただただ熱くなってくる。その間にも足下の道路には野次馬が増えていく。今頃、とつくに警察に通報されている。

まずい。止められる前に、早くしなきゃ。心を決めようと視線を上げ、今にも沈もうとしている夕日を見る。濁った毒々しい光、それが最期の太陽だ。爪先へと重心を移す。

でも、できない。飛び降りられない。死にたいのに、生きていられないのに、飛び降りられない。背後で男の声がした。警官だ。振り向かない。振り向けない。自分の体が自分の物じゃないみた

いだ。足下から背後から様々な叫び声が聞こえ、わんわんと耳から頭の中へと唸りを上げて渦巻く。

「生きてれば、いい事がある」

「親が悲しむぞ」

「早まるな」

そうかもしれない。今、飛び降りたら、もう後戻りはできない。死んだら、生き返れない。生きてれば、いつでも死ねるけど。

でも、もう生きてられないから、ここに来たんだ。今更、生き直したって、どうせ同じだ。もしかしたら、自殺未遂をやったと言われて、もっと生きにくくなるかもしれない。そう、ここまで来る前に、いやってほど考えた。悩んだ。それでも、やっぱり死のうって決めたんだ。早まってなんかない。ちゃんと考えたんだ。もう死ぬしかないって。

「そんな馬鹿な事は止めろ」

「死んじやったら終わりだぞ」

もう終わってる。死ぬ前から終わってる。死んで終わりにした方が、よっぽどすっきりする。楽したい。馬鹿な事でもいい。生きてたって、どうせ馬鹿な事だ。

「君が死んだら、悲しむ人がいるだろう」

いる？ そんな人。親は泣くかもしれない。

「友達が悲しむぞ」

友達？ 泣く人もいる？ 泣くかも。でも、どうせ、私が死ん

だくらいで、泣いたって、どうって事ないよ。

私の友達。友達だった筈の子。泣く？ 泣いてくれる？

長い時間、彼女は飛び降りる事ができず、引き返す事もできず、ただ屋上で立ち尽くしていた。

膠着した状態に苛立った地上の野次馬から、声が飛んだ。

「早くやれ！」

彼女は野次馬とは反対側に走り、屋上から身を躍らせて死んだ。